圓先大師傳

廿一 廿二

法然上人行狀畫圖第三十一

上人はゝに仰られける御詞

上人の給へく口傳なくして淨土の法門をゝるは。往生の得分をゝるなり。其故は極樂の往生は上は天親龍樹をすゝめ下は末世の九逆十惡五逆の罪人までをすくはんとの願なり。身は家下の凡夫にして善人をもすゝめ給へる文をゝるく。卑下の心をたにして往生を不定におもひて順次の往生を

得たるなり。まつうまし。善人をすめ給へるおもをハ
善人の分と見。悪人を勸め給へる所をは我分にて
見て得分とするなり。かくけてくこたらぬまい。
定往生乃信心うまりて。本願に乗して
順次の往生疑ひなし
又云。念佛申ものいまうて別の樣なしたく申せん
極樂へむまるると知て。心ばいうて申ばいまいる
なり

又云。南無阿弥陀佛といふ。別したる事なに思へ
かなし。阿弥陀ほとけ。我をたすけ給へとなり
と心得て。心ばい阿弥陀ほとけ。たすけ給へとて
をひて。ばいに南無阿弥陀佛と唱るを。三心具
足の名号と申れ
又云。罪八十悪五逆の者なをむまると信して。
小罪をもをそるとと思ふ。罪人なをむまる。
いたいとんや善人をや。行い一念十念むなし

うゝぶと信じて無間に修すべし。一念なほむ
なほいはんや多念をや
又云一念十念に往生せすといへども念佛を
疎想に申す信行をさまたゝるもの念を不捨
者といへどもて一念定不定に行ハ行ハ信を
はゝまゝるもの信をい一念にむまれと信し
行をん一形にゝもむへし。又一念ハ不定に思ふハ
念ゝ乃念佛ゝに不信ハ念佛にまれるなり其故ハ

阿弥陀佛ハ一念に一度乃往生ハあてをれ弘
へる願なれハ念ゝに往生ハ業にハ為なり
又云煩悩ハすくあれきをもうへるこゝぶ罪障の
軽き重きをも沙汰せぶたゝ口に南無阿弥陀佛
と唱へて聲にきて変定往生ハにりしをれ
ゝへ
又云ゝとゝ餘事をいとなむとも念佛をまく
これをするとにりしをあせ餘事ハ念佛と

こはたりふ面うぜ

又云往生ゝ稱ゝ極樂ゝまいゝん事ぞまめやうて

たゝひ入たる人の氣色ハ世ゝ中をひゝゝゝ恨

ある色ゝて常ゝはある也

又云人の命ハ食事ゝ時ゝむせゝく死ゝる事ゝを

なり南無阿弥陀佛とかゝて南無阿弥陀佛や

のゝ入面きなり

又云法命ゝ道理と云事あり ほのほい宣り

のゝわ水いくぶりちゝまてたゝ風菓子ゝ中り

ゝゝ物あり ほのまゝ物ありごゝまゝいゝゝ法命の

道理なり 阿弥陀佛乃本願ハ名号ゝて罪悪

ゝ衆生をゝちびゝんとゝひ給ゝゝたゝ一向ゝ

念佛たゝゝ申ゝゝ佛ゝ素通ハ法命の道理

ゝてゝゝびなゝ

又云善導ゝ釋を拜見ゝして源宣ゝ月ゝ三心

を南無阿弥陀佛五念を南無阿弥陀佛四修も

南無阿弥陀佛なり

又云弘願といへるは如来経説一切善悪凡夫得生者莫不皆乗阿弥陀佛大願業力為増上縁也

善導釋し給へる子ごのごとく凡夫不堪の身ひとへにもっぱら弘願をたのむべしなり

又云我ハこれ烏帽子をきたる男なり十悪の法然房愚癡の法然房が念佛して往生せんと云なり

又云学生胄よりなりて念佛やうなんぞうんぬんぬかずけといへり智恵をもすけよう持戒をもすけよう道心をもすけよう慈悲をもすけよはすれば善人も念佛し悪人も悪人なり念佛して往生むまれつまれてにて念佛する人を念佛よりとけさてぬこいこそ也ちわたなぐ悪をあらためず善人となりて念佛をん人も佛の御

心より叶ふべきなり。ゆへよしあるべからんと
思て。決定心おこすべし。人往生不定の人なるべし
又云。佛告阿難。汝好持是語。持是語者。即是持無
量壽佛名といへり。名号をきくこと。信ぜ
ずいきうばるゝ。たとひ信ずといへども唱へ
ぬい信ぜざるが。ゝゝ。ぜひ常に念佛をべきなり
又云。近来の行人。觀法をなす事。ひまを。佛像を
觀ずることを。運慶康慶が造たる佛を。觀

あゝ。ゝすべきゝ。次。極樂の莊嚴を觀ずること。
櫻梅桃李の花菓を觀じあゝ。ゝさん事なる
かゝべし。たゝ彼佛今現在世成佛。當知本誓重願
不虛。衆生稱念必得往生の釋を信じて。ふく
本願をたのみて。一向に名号を唱べし。名号幾
唱迄。三心をのゝ具足するなり
又云。往生の業成就は。臨終平生にもるべし。
本願の文簡別せざるゆへなり。惠心の心を。

平生にもつぱらとなえきり
又云。他力本願よ乘ずるに二あり。乘ずるに二あ
り。乘ずるに二こいぬる。一よい罪をつくるごとき
乘ずれば其故いかくけごとく罪成たるれい。念佛中
ごとく往生不定なりことわりふ時よ乘ずれば二のは
道心のおこる時乘ずれば其故いたれしく念佛中
らをかくけごとく道心あわて申うんどる念佛
よてこそ往生いずんずれ無道心よてい念佛すん

このなふ色うるれば。道心をさしらして本願をつきに
たるふ時乘ずれば。なりぬよ本願よ乘ずるに
二の樣といぬい。一よい罪たくる時乘するれば。其故い。
かくけごとく罪をたくまい。決定して地獄り
落べし。たるよ本願の名号成唱まい。決定往生
ずん事乃うれしたよわこうぬ時よ乘ずる
なり。二よい道心たるる時乘ずるなり。其故い。此
道心よて往生すべう。これ祖の道心い。無始よ

まことにうたがふこころもいまだ生死をはなれざれば
故に道心に有無を論ぜば造罪に軽重をいふべし
ゆゑに本願の稱名に念々相續せんにはよりてぞ
往生は遂ぐべきことなりしかるに時に他力本願に乗ずる
なり
又云ぬぎこにたとへたる麻を成に目をうけばして
人影にかへばしるひるる方へなびくがごとくなり
ひとにまことをいたすべきなり

なるなりそれ定に他力をふかく信じて萬事を
なげうち往生をねがふべきなり
又云稱名の時に心におもへばまぼろしの人の膝をだに
ひきぬきかくしてやたをけ落へと云定なる
べし
又云七日七夜心無間といへども明日に大事をいとなむと
今日をばげにもごとくなるべし
又云人の手より物を得んにずでに得たらんと

いまゝ得さるといづまこう勝劣きゝ源宣ふすでよ
得たる心地よて念佛い中なり
又云往生ハ一定と思へど一定れ是不定と思へと
不定也
又云念佛申さんを此十人あんよたとひ九人い
臨終あくて往生せばらを我一人い定して
往生すあてとたりふべし
又云一丈の堀をこえんと思ん人い一丈五尺をこ

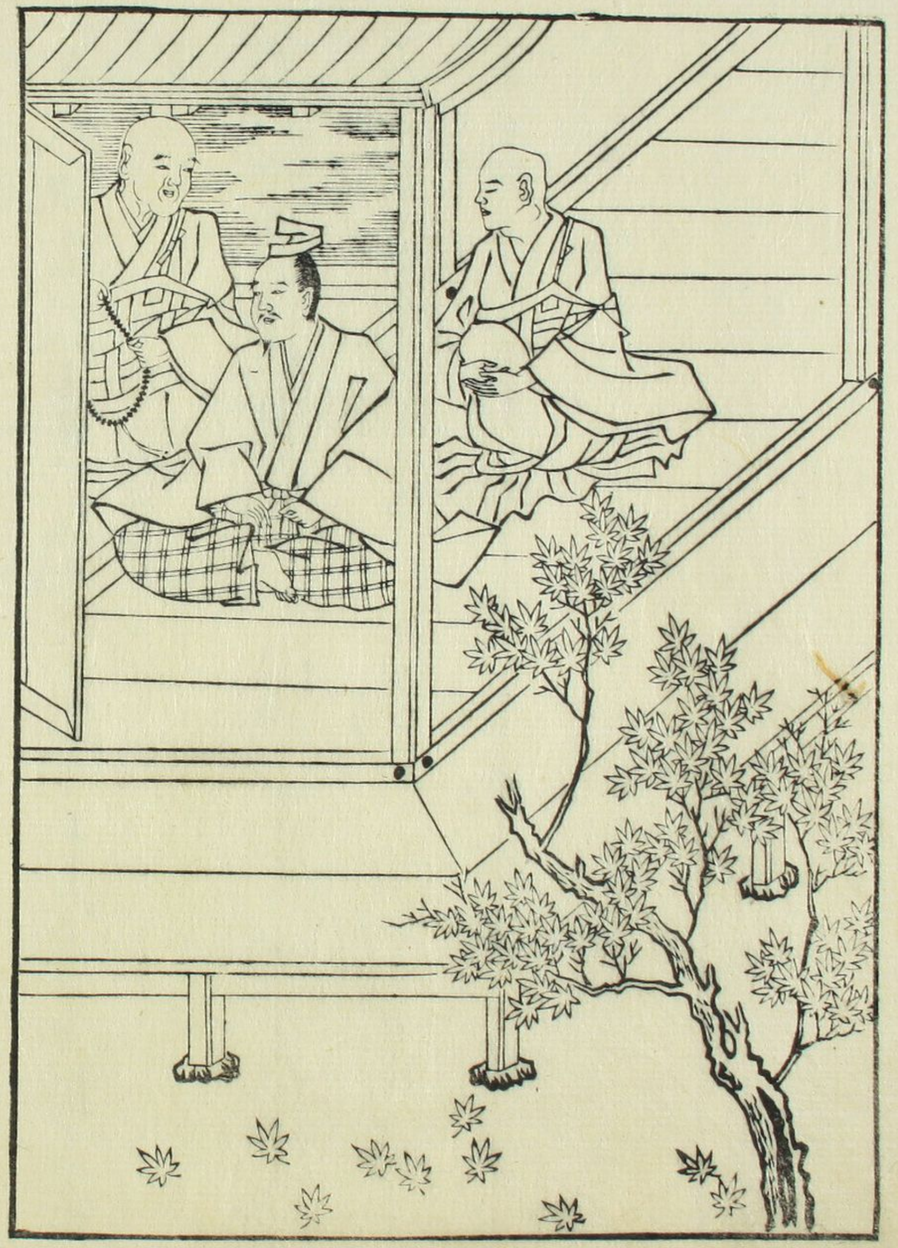
えんとこゝろげむあて往生成就ぜん人い定乃
信をとりてあひこゝろげむべきなり
又云いけれハ念佛の功たゝ生れい淨土へまいわ
なんぞてをかくてを此身よい思ひまづふ事ぞ
かきと思ぬまた死生たにまづらひなし
或時上人あいに此度ふおほせやたと信に
なる後乘願房承て上人だよを加様よ不定實
なる信の信ゝんよいそれ餘の人いいぐし信べきこ

申されど。上人御ものがたりに弥陀ほとけの蓮臺に
のるまでいのちの此思ひをなす様べきぞと
乃給ふ
或人上人の申さるゝ御念佛に念ごとに佛乃
心ようなし様んなど申なるをいかゞと
上人のたまはれど。智者にておはしませば名号
の功德をもくはしく志るしめ本願の様をも
あきらかに心得あるゆへよと申なるこれ汝

本願を信ずる事まぐるかわらず。孫陁如来の
本願乃名号ハ草の葉にも水をもむた
ぐひなきものゝ。内外ともにうけて。一文不通
なるごとなれども。必むまるゝと信じて。真實に
称して常に念佛申ば家上の機とす。そ
智恵をもちて生死をはなるゝ。源空いう
てうかの聖道門をすてゝこの浄土門に趣へきや。
聖道門乃修行ハ。智恵をきはめて生死ば

なれば浄土門の修行は愚癡なるわれら極楽に
むまるべきものならぬ行なれば
又人々後世の事申なるたゞくに往生は奥
食せぬものなれといふ人あり或は奥食する
ものなれとすると云いぬ人あり論じ合ふ
上人きゝて弟子に往生をせんは難ぞ
せんぞる奥くいぬものせんは猿ぞせんぞ
ふかをとゝぐくいぬよもよゝぞ念佛申

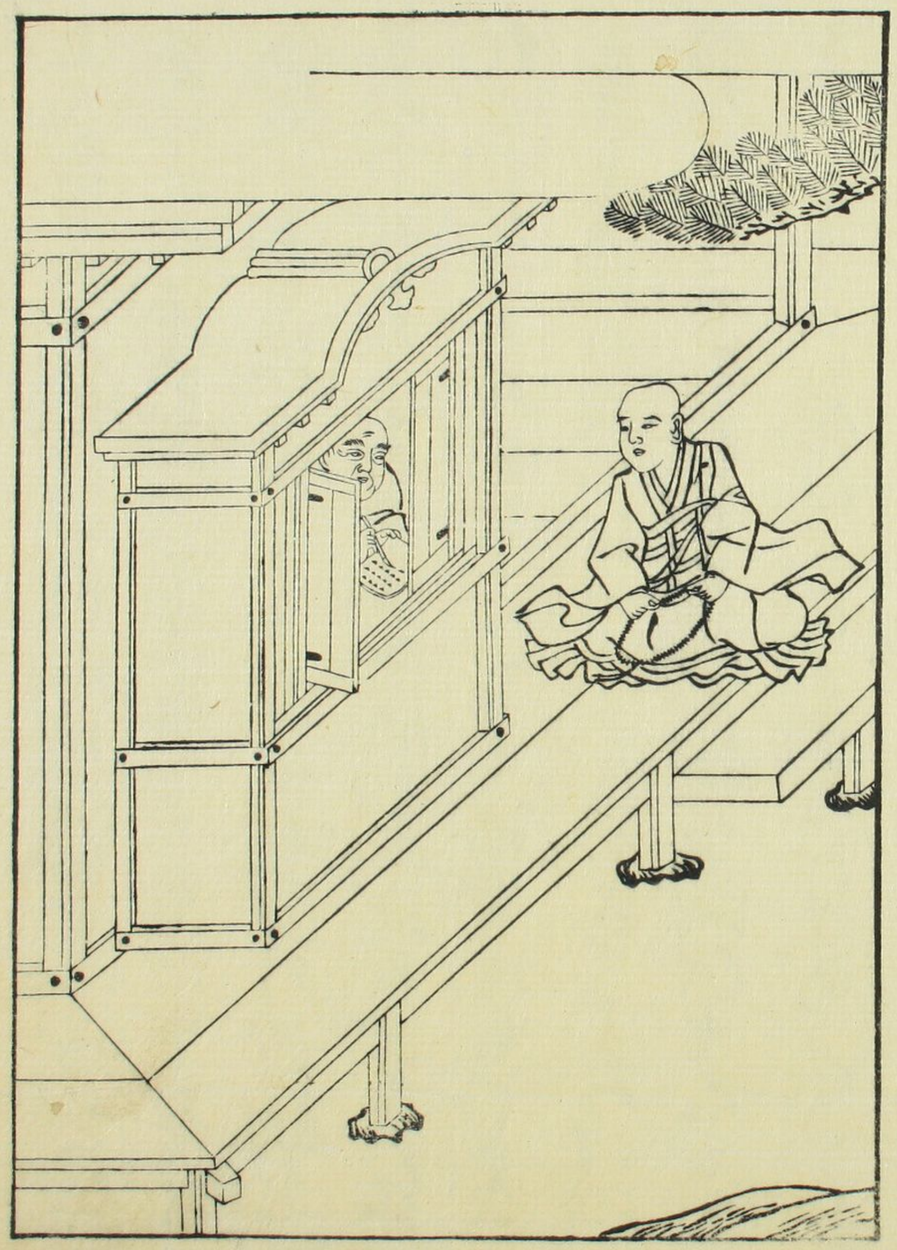
り往生はするならぞ源宗はまゝたるならぞ行ゝを
者る
上人御往生の後三井寺の住心房の夢の中に
こゝられて念佛はゝゝ風情を出ゝ申
ゝゝ外の事ぞと上人答給る



又一紙よのをての法をく末代の衆生を往生
極樂の機よあてをくるに行すくなくして
疑べし況や一念十念よ足ぬ為て罪人をもて
疑為をかれを罪根ふかれをきて一ぐとの法へり
時をくれをとて往生をば疑へし況や法滅以後の衆生をば
をて往生すべし況近来をや我身をもしても
疑為をくら況や自身ハこれ煩悩具足せる凡夫也
いまの法へをば十方浄土おかれと西方を願ハ

十悪五逆の衆生の生為故なり諸佛のなをに
弥陀よ歸したてまつるハ三念五念よ至為まで
こぞうを来迎し給故なり諸行の中に念佛を
用るハの佛の本願なる故也いま弥陀の本願に
乗じて往生しなんよ願をして成ぜんと云事
あるべし法本願よ乗ずる事ハ信心をふかれよ
をるべしをけるき人身をうけてあひがたき本
願よあひておこしをかれ道心を發してをられを

ぐ紀輪廻の里絶えなんとして生まれ浄土に往生
すん事悦び中に悦なり。罪八十悪五逆の者を生
るとも信じて少罪をも犯さじと思へ。罪人
なをむかへる。況や善人をや。行は一念十念なれば
むかへ給ふと信じて無間に修すべし。一念をも
生ぜば況や多念をや。阿弥陀佛は不取正覚の
言を成就して現に彼國にましませば定て
命終の時は来迎し給ふ。釋尊は善哉我教に
随て生死を離と知見し給ひ十方の諸佛も
悦哉我證誠を信じて不退の浄土に生ぬと悦
給ふ。汝に行き地に即て悦べし。このゆへ
弥陀の本願にあふ事は行住座臥にも報ずべし。
佛の恩德を頼て念を頼ぬまは乃至十念乃
詞信じて猶信ずべきは必得往生の文也
かく此書世間に流布して上人の小消息といふ
ものなり



上人念佛の行者は心得違ひ樣樣なる事へ落へる
事あり所謂是れは阿弥陀をたのみ奉る
念佛をして信じたてまつりて諸佛菩薩乃悲願を
うるはしめ給てまつり法華般若等は目出たき
經なりとて是をよむ事ゆめゆめなし
通ずる法阿弥陀佛を信じたてまつりてよろづの
佛をもまつりをろがみ乃聖教を疑ひをもつて
ぞんすべし信心はひがごとなるにてあるべきも
信心たがはざる法なり阿弥陀佛は心より叶はざれば
念佛をもつて弥陀の悲願よりほかの事は一定
なり又罪をもつくりぬべきものとてよろづの
すべし弥陀の本願をかるしむるにてあるべ
又念佛を多く申さんらんに數返はずば成
たしと他力をうたがふ樣にあるなり
事は多くまこゆるか樣の僻事ゆゑにそ
わるべき法いつもはれなり阿弥陀佛は罪つく

をとすめ給ふる。ゆゑをひとへに口業に悪をも
らすえん源罪をのこしたりみる法につる
極く悪をなす虚言をつくこいぶりてうもの
をつくる男女は輩ほうほうの罪業をす
るあ煩悩をおこすむる事をつたづこれ
天魔外道のまつりごとなり。往生極
楽のあるうきなりと思ふて念仏は数を
多く申すをいふ。自力をたのむといふ事なり。

ゆるをは笑えんばあるまじき僻事なり。
ただ一念二念をとなるとを自力は心なん
人い自力は念仏とすべ。千遍萬遍はとなん。
百日千日よるひるはけをたるむこと偏り
願力をたのを他力はあるべ人の念仏ハ
聲を念をつくなる他力は念仏よてある
ゆるされば三心をおこる人の念仏は日を
夜を晴を魁をに唱をとをつなる願力

を信じ他力ばかりの心なたる心よりて唱居をれハ。
かけてをろかれくを自力ハ念佛といいぬべ〻ぞ。
まる三心と申事ハ。そ乃子細を志わたる人の
念佛ハ三心具足ぬん事い左右ハ及ばぬや
く三心ハ名ばかりを志ぬ無智ハ輩の
念佛ハいいでゝ三心具し侍へき事を申
人を惑やゝん。これを邪事にて侍なり
たゝし三心ハ名ばかりを志ぬ無智ハ者

なれども。弥陀の誓願をたゞすらも疑ぬ
心なくして此名号を唱まゐらせ心の即三
心具足ハ心ゝてあるなりされば法然ひゝに
信じてゝ念佛をハ三心ハをのゝ具
具をるなりもしまゐらせ
文不通ハ輩の中ゝを。一ちに念佛する者ハ。
臨終正念ゝして 同出ハ往生をゝをハ。
こゝを現證あゝたる事なり。露塵を疑ぬ

面々ぶぶ中くよりをきゝぬ三心沙法して。
面々さはりなく心得まゐる人々は臨終を思ふ様
なるぬ事なほ。ゆゑにて来迎をく心
得へき也。又ときく別時に念佛を修して。
心をを分をもらげまゐ。それをとむべき
なり。日こに六万遍七万遍を唱へ。ぱらてを
見ぬ面ゝ事にくあれども人の心ざはいく
同なる事耳なる事ぬ事はいゝ見くやすむ心

すなくあけ多くれい怠くらして心閑なるぬ
様にしてのこ。疎略なりゆくなわ。それ心後
とゝ多くんためにハ。時と別時に念佛を修すべき
なり。ゆの事の善導和尚を祈ん。ろり
らげまゐ。惠心の先德ををいくをへられ
たり。道場ををひまはくろひ。花香をを備
をてまつゝん事。たゞらゝれ見へたんり
ゆゝゞよ面ゝ。まる我身ををゝにきよめて

道場に入て或ハ三時或ハ六時なんとに念佛を
修して同行なとあまるあらん時いこのハ法
くいわく不斷念佛をも修すべし。かゝ樣の事い
をのく樣に隨てくらかゝ始めて善導和尚ハ。
月の一日より八日に至るまで或ハ八日より十五
日に至るまで或ハ十五日より廿三日に至るまて。
或ハ廿三日より晦日に至るまてと行ふ
なり。面と指合はゝん時をゝひて七日ハ

別時を常に修すべし。ゆゑくすゝるまこと我
いのちのよすはるまて不善ハ心あるべからず。
まるいたをく臨終正念に安住して日よハ
阿弥陀ほとけをたうとぶは弥陀ハ名号を
唱へ心よい聖衆乃来迎を待ゝてまつるべ。
年比日比いとゝ念佛の功を積たりとも臨
終に悪縁に逢ひ寂後にあま心もたゝりて。
念佛の心行をを退しぬるをハなゝ順

次の往生志しるべしるべし。一生二生なりとても。三生四生なりとても。生死のなれまゐるべひく。出離の道よりてこほらんこゝまめやうに心うを。口惜き事ぞ。ちれど善導和尚の御ちめよ。願弟子等。臨命終時。心不顛倒。心不錯乱。心不失念。身心無諸苦痛。身心快樂如入禪定聖衆現前乘佛本願上品往生阿弥陀佛國。かゝ。弥んゝろよ發願せうとの給へ。いよ〳〵臨終の正念をハいのちうしゝ。弥ゝ願き事なり。臨終の正念ハいのちうしゝ。弥陀の本願をたのまぬものをたゞ申人。善導よいいかゞ。たる学生ぞと思ふ。あれあるまゝ。をそろしをそろ。まる念佛い常にをこたゝぬゞ。一定往生する事にてあるれ。善導すゝめての給へく。一發心已後。折言畢此生。無有退轉。唯以浄土為期。又云。一心專念弥陀名号。行住座卧。不

問時節久近。念々不捨者。是名正定之業。順彼
佛願故。ゆきいへわ。うやうにすめまゝくゐる
事。あゐるおほけなれらをもてくもよこのま
のせごゝ。頼而。信ぞへ。更よ
疑事なうれ。ゆまとゝも念佛を行じて。
ぞにくゝき念佛者よたりめれ。よゐげの
人をえるゝ。ごれもぞてゐるゐ。
あゝまゝくゐるなれだ。ぞ刃れゝまゝに。

我ハゆくゝき念佛者よてあるをれのれ。誰く
よを勝たりと思なり。これ心をぞゝくく
たくゝむ面き事ゐわ。世をひゐを。人をれか
なれだ。ゐれたく林のたゝにこゝり居て。人をも
ちゝを思ぬ念佛者乃貴く見出たまちゝに
たゐくあゐ成ぞきゐ。ゐゝをあれゝを。ハ
ゐを祖の念佛者よりもあゝ。ゐをたりゝ。僻事
なり。これ思ハ大憍慢よてあを。即三心をゝく

なりぬるこゝ地をたゞちに魔縁のきゝりて
往生成就ぐゝめわ。ぬまを我身のいゝぐゝて罪業
をも滅し極樂へ生まいる事なゝばこそあゝ幾。
ひらへよ阿弥陀佛の願力よて煩悩をものぞき
罪業成もけしてかゝぐけなく手だゝうこゝげ
うち極樂へむうへゝらわて歸らせゝ給す事也
我ちゝにて往生ゝ為事れらぐこそつれゝ
ゝしゝといぬ慢心をばたゝこゝめ。憍慢乃心ぶ
たゝこゝめまぐ心行うれらぐあやまる故ゝ。
ぬちゝとゝ誘よ阿弥陀ほゝけ願りそむ紀
ぬるをれまて弥陀も諸佛も護念し給ぐる
ゝにい悪鬼れたゝめてをなやまちるゝたゝ。
迦こゝをたゝくしゝて憍慢れ心成おこすべゝ成。
あれゝこゝくゝ御ん心ぶるよをゝへをれゝま
へちゝふゝく上人教誡の詞を信ゝて敢て本願よ
ほゝるたゝひなく往生乃前途を遂へきをれ

法然上人行狀畫圖第二十二

或人（不註名字）上人の勸化に歸してのち安心起行の
やうをこゝろに申さるゝにきゝて上人のたまはく
はなはだよろこぶ狀云御返事こゝろにうけたまはり
侍ぬかゝ樣に申事は一分ほさゝり侍るべく往生の
御心ざしをもくなり侍ぬ爲ゝんよはをもは
もうへわを侍べき事にて侍ぬべくたびにく
を申たくゝて侍へぞとてワゞ身はいやしく。

我心はたらめきをうるゆへ乃人間ばかりまことしくもこれ
孫陁のちうひをたのみて決定往生はうたがひ
なしとおもふこころをたてゝ他へうつる人の心
はまくるまてぞうひうとをぢにゆめさかるしは
うき世いとうわはたのしきことをのをりあて
すべて後乃世はかも志ぬ人を他又後をかてそうま
事はかはしたちをなふ人よはまてを
かまこれは心はうしてひとすぢに一行をたの

まぬ人を他又いはまはは行はてもをとよわこうる
ぞこうはえはなひをめつるをいつれるをこうはは
きうけごをもりはをは執心をあつたぬ人を他又
合はいうをを信をおこうてをとをぢにおはひたき
ぬとうるはをのちにいうちすつる人も他くのえ
他てをこうく浄土の一門はいうて念佛の一行を
をうにをる人をあちかぐく他事は我身一乃
なけきとうをい人をは次思他へうを法はうりて

人よりぬ理をうたがはぬほとの人もあるべき
世ふて世ふやをれづゝす[illegible]ゝ世ふも
[illegible]ゝあれづゝうゝさよ。申いつる事をすてん
じるやと思ふゝゝ事のそよて世事ハ心うく
かれゝを世てこのうへいまひときはぐ浄土よ
むまれてさら[illegible]ひくのちにいそに此世界に
うへわきるべく。神通方便をて結縁の人
をを無縁のをれをもほむる[illegible]もそゝ[illegible]をも。

[illegible]ゝをく念佛よすめいれて浄土へむかん
とのひをたうてのそそ當時ハ心をも
なくさむる事にて世ふりこれおほせよそ[illegible]ぐ
心ざしをふゝある心地してあやりにうまゝく
世へぐその後そて世ハ[illegible]たゝくいまやうに。
ぐゝくしを。御沙汰世てゆくゝ事をあやう
う浄往生をたのゝ[illegible]ゝ羽よ思食さるめちせ
給へを世。詮ぐていゝ人のゝゝひ申ぐゝ事にて

然ハ浄土ハ宗ごとに違ひ候ハ、其事よすがに
なるほど大事なることゝ存へきこの世の名聞
利養ハ中〳〵申なかぬ事にいまゝ〳〵敷
成て昨日今日まれにたゝへぎりにてんち
たるなりのれさまにて候めれん事あるゝを
申たゝるにて候ハ浄土ハ遠く思ひ成まゝ
めて恩食なるゝ如へく候さるよい聖道浄土の
二門を心えなりて浄土ハ一門よりゝ多まゝ

ますべき由歟申候きいまい浄土門よりきて行を
思き様を申候。浄土より往生せんとれをゝん
人い安心起行と申て心と行と相應すべきなり。
それ心といつい観無量壽経よりきてゝ衆生
あてゝ三ゞ國よりむまれんとれをゝんものい三種ハ心を
たゝてすれいち往生すたるよをゝ三と成る。よい
至誠心二よい深心三よい廻向發願心なり。三心を
具せるゝものハ必ず此國よ生とゝり。善導

和尚これ三心を釋していはく。ねがはくは至誠心。
至こといはく。真なり。誠といはく。實れり。一切衆生の身
口意業に修する所の解行。ともに真實心乃
中ありなすべきこと。決あらんと思ふ。外は賢善
精進の相を現し。内は虚假をいだく。譬へば
ばば内外明闇をえらばざるがごとし。これら決真實なりと
なるよ。かゝるゆへに至誠心となづくといへり。これ
釋の心は。至誠心といはく。真實心なり。それ真實と

いふ。身よりあらはるゝまことの口にいひ心におもへる事。こゝ
ろもとより心を裏とすべきにあらず。内は心
ろてかをうぐる心なれをいはゞ。此心は。
うわべ世をそむきてゆくものこゝろにおもをしくと
なづけ人くれ中におほく用意すべき心なり。
よて偽なり。つきもの人をいぬゝるなれゆへに
世俗執ぞるこゝろ。しなごとにて。
などくりはたらてゆ名聞利養をげうにあ

すてたるぐうりをかくいうごき事にて今世
はまにて心はさけのうるはしさにとらはれて
さらにあはれ世間はれ人乃心をばまつはうと
かまいうごくるをこれそい事意なれと心ざ
さる心よりてこそこれほうはきうれまてすう
なる住所をたづねるまてを心のまゝはまん
とあをいたぎてるして本尊道場の荘厳まうれの
さらにあれのこゝらなどの心がうくものあうれ

なんこゝかゝをへ人よ見えまうまん事なれを
孤どるほゝにはゆれ事を人のそ里をなんん
事あゝとれをひいうれむ心よわほうにれるひ
まぬる事なるかゝ様なる心よ乃をなりて佛乃
ちうひをたのを往生浅祈ゝんといふこはれるし
いまゝ法もせぬ事れ為ゝて至誠心うけく
往生せぬ心ゝへよて作なりゝくゝ申へをひ
らへよ今世れ人間ををいふてをあわなんへの

そ土つわものゝ人わこゝぬがようきゞわと申儀よりて俗
ハ淀ノ人同様ノ人ノ是ハ事ハ俗ノごとくなるものゝ
わりひいきて往生ハ此つわりよりなるかゝ様ノ人わ
見ぬやうてひきなるハ俗ノ人事ハ西ノ方なる
くらわ〳〵を俗ノ人ノ方にあらりてこれ心え
ちせまい〳〵せんがためにて申俗なりこれ心り
はきて四角ハ不同あるへしよい外相ハたらとげ
よて内心ハ貴ゝぬ人あわ二よい外相も内心を

ちに貴かゝぬ人あわ三よい外相ハたらとけもかゝて
内心ハきゝとゝ人あわ四よい内外ちに貴き
人あわこれ四人の中にされの二人ハいまきゝぬと
こゝろハ至誠心ゝけたる人なりさを虚假の人を
なゞくべしのちの二人ハ至誠心具したる人あわ
こゝ地ハ真實ハ行者となゞくべしされゞ誣なる
ハ〳〵ハ内心よりこゝの心をたゝて外相をバ
よくもあゝくをゞてをかくてもあるべきかわと

おぼえ侍也。たとひ世間いとなむ事を極
樂をねがふ人事も。人目ばかりはばかりをいでぬこの
心をたすべきよて侍也。是を至誠心と申れり。
二は深心といふ。善導の釋によりて深心といふ。すなわち
いたつらに信ずる心なり。こまかに二種あり。よい
ものを定して。うたがひ煩惱具足せる罪悪
生死の凡夫なり。善根薄少にして。曠劫よりこれ
かたつねに流轉して。出離の縁なしと信ずべし。

二はいはゆる阿弥陀佛の四十八願をたて。衆
生を攝取し給ふ。なかんづく名号を稱ずること。下
十聲にいたるまで。願に乘じてかならず
往生をとげんと信じて。乃至一念をもつぶ
事なかれ。ゆへは深心とは。又深心といふ。堅
定して心をもつて。佛教にまことをいたして修行
してなほ疑心をのぞくべし。一切の別解別
行異学異見異執のために。退失傾動せず

ぶまこいへわ。これ釋乃心いたり究よいわ乃
ほどを信し後よハ佛の願を信ずるなり。それ
故ハ。ひとたび究竟信心をあげどして後の
信心波釋し給ふ。ひとわくれ往生波称ぐん
人ぶつ。ひ本願の名号をとなふと。こゝ
ろ心よ貪欲嗔恚れ煩悩をもたゝ乃に
十悪破戒等れ罪悪をもたるる事あるべ。
こゝろに自身をもろ〳〵究て乃れほど波ハ

ろく本願を疑ひ波ハ。いまこれ本願に十聲
一聲までに往生すといめ。たほろけの人よい
あ〳〵なるべ。おほえ波ハ。ふる波善導
和尚未来の衆生れ。このるゝびをたこん事
なるべ乃てこれ二乃信をあげて我等ぐいまる
煩悩をも斷ぜ波罪業をもたる九更ゑれも。
うく孫陀れ本願を信じて念佛をれば一聲に
いるまで。決定して往生するよを釋し

たまへるこれ釋のこころにて心よそていうくおぼえ
侍れはまことにうくおぼえて釋しなおさるほ
うは往生ハ不定よそたのえ侍ハまとあやうく
おぼえ侍ぬまこれ侍を心えわぬ人やうん。
わゝ心ハ弥陀ぬまで往生いのれゝこころをハ申
あひて侍めれそのうゝびの風ゝて往生せぬ
心まて侍なるものをやゝ心乃善悪をもうゝわ
ゝ罪ハうるまれすれをも沙汰せゝ心乃

往生せんとたのひてロハ南無阿弥陀佛とゝれ
へてハ聲ハきて変定往生ハ思侍ふすべ。
その変定心よりわてすれハち往生ハ業を
ちるまるたりかく心えゝ往生ハ不定なり。
往生ハ不定とたりへゝ。やゝて不定なり一定と
思へゝ一定なる事にて侍なりハれハ詮ハふく
信ゝる心と申侍ハ南無阿弥陀佛と申せゝ。
その佛ハ誓にてハうれ当乃をもきゝ侍ゝ一定

むとへ給ぞとぶらくたのこていりなるこゝ給もへわ
ろげぶるこゝふ心のすうこをなきを申給なり又
別解別行ゝ人よ屋ぶゝ給ざまこと申ハちこり
こゝこ行こゝなゝん人のいこんこてつまて念佛
をこをすて往生給うきゝふ事なるゝゝと申給なり
乃至ゝこゝひ佛きこゝわて光給こゝれち舌をい
だゝて煩悩罪悪乃九ゝ念佛して決定往生
すゝといふ事のひゝ事ぞ信こへゝゝゝとゝいふこゝ

こゝ我よりて一念こゝを疑心あるべゝゝゝゝそゝゝゝゝへ
一切の佛ゝこゝれ同心よ衆生をこゝちびき給なり
まゝゝ阿弥陀如来願をたゝてのゝまゝくゝまを
佛よなゝんよ十方ゝゝ衆生ゝゝ國よむゝゝゝれんと
弥ゝひてゝゝ名号給唱る事下十聲よいこゝゝゝて
我願力よ乗ゝゝて往こゝむゝゝれすといゝゝ正覚を
こゝゝとこゝひ給ぬそゝれ願成就ゝてすゝゝゝり
佛よなりたまへゝゝゝる在釋迦佛ゝゝの世界に

いてゝこれ佛の本願をとき給へり。又六方よりの
く恒河沙數の佛まゝゝて。ことに舌根のべて
三千大千世界にわたひ。無虚妄の舌相を現して。
釋迦佛は弥陀の本願をほめて。一切衆生をすゝめて。
かの佛の名号をとなふきはぢ。ゑて往生をゆ
とをしへ給へるハ。決定してうたがひなき事なり。
一切衆生これを事実信とべゝと證誠し給へり。
かくのごゝく一切の佛。一佛をのこゝろ同心なり。

一切の九支念佛して。決定往生をべきものなり。
或ハ願をたて。或ハその願をとき。或ハそれ説を證。
すゝめ給へり。これをいうへ。ゆるいうなる佛のきゝて。
往生をべゝとゝ。いへるぞおもいあはせ乃
佛をゝこれゆへなり。佛さゝりての給ふもたゝく
願ゝとゝ申なり。佛なをまゝれ。いゝんや菩薩をや。
いゝんや縁覚をやいゝんや九支をやと心えいきて。
一たびこれ念佛往生乃法門をきゝて信をたゝて

のちよいかれ為人ようく申とも。疑心あるへからず
ところてハおぼえ難へこれを深心と申候也。三ツ
廻向發願心といふハ。善道導ハ釋よいく過去をよび
今生ハ身口意業よ。修ちること為ハ。世出世乃
善根をよび他の一切ハ九聖ハ身口意業ヲ
修ちる所の。世出世乃善根を隨喜してこれ自他
所修ハ善根をりてこれをくをこれ真實ハ深信の
心乃中に廻向して。ハ四ハ願よむ願ハ願

なり。又廻向發願といふハ。ハ為定の真實心の
中に廻向してむまるをこそ思をなせこれ
心ぬく信してなりて金剛のごとくなり。
異學異見別解別行ハ人のために。動乱破壞
せられさるといへり。これ釋乃心ハ。ハ
ばきてハ。ハの世をよび今生に身よも口よを。
つくりたてし功德をこれをこれをくを極樂に
廻向して往生ハ願ずなり。次よいるぶ為ハ事

ふてもの人の事にてこそ世の果報をもいのり
又おなじのちの世の事ばかりも極樂なる餘の
浄土をむまれんこともこゝろ〻の都鄙にしたがへ
こゝろ〻人中天上をむまんこともかゝるひがくれ
ごとくの我をこそ〻れ自事に廻向する
事ばかりにて一向極樂に往生でんと廻向すべき
なりこゝろこれ理なれたゞひさぶあらんさたよ
これ世のこゝろをいのりあるぬ餘のこゝろも廻向

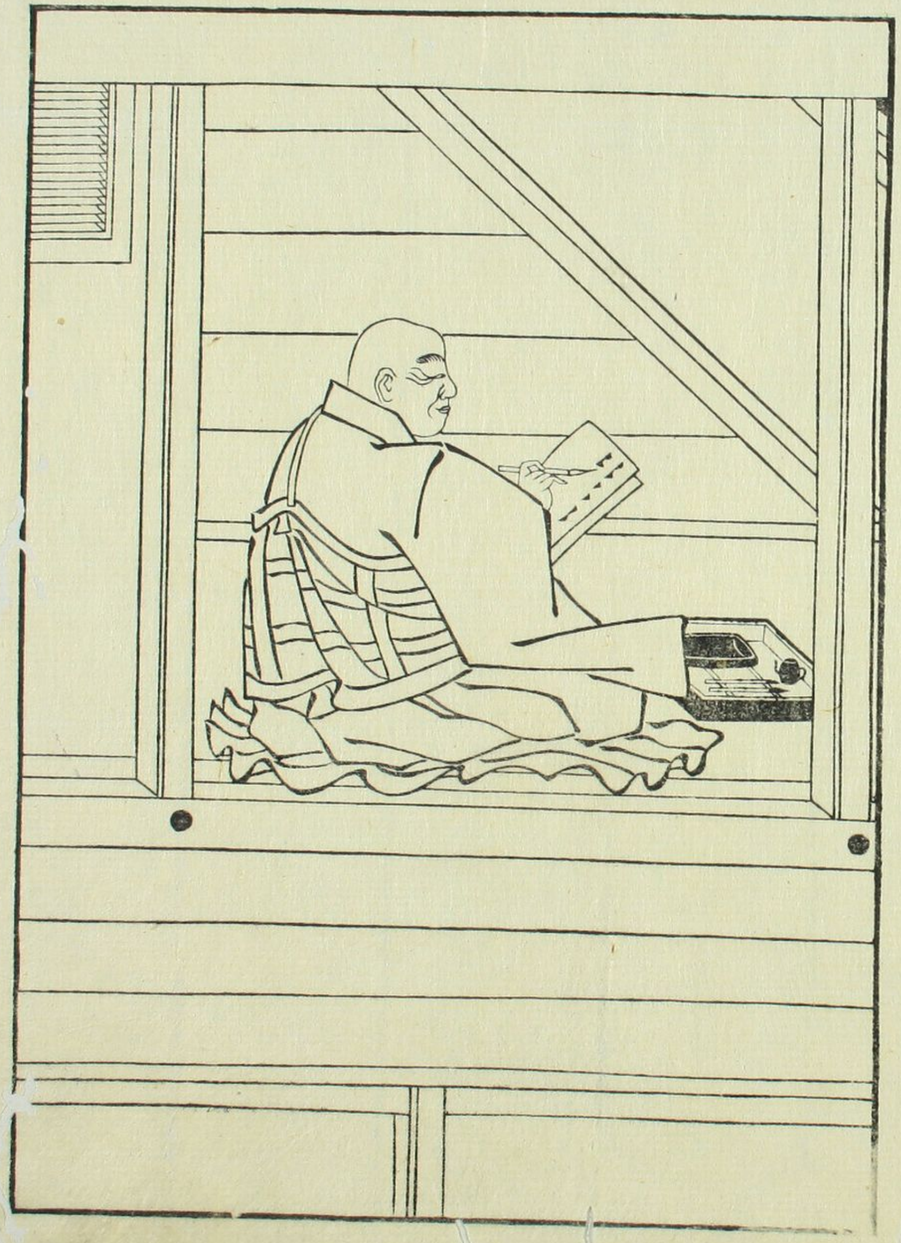
きる功德どもをそこなはれらり廻してはまいらせ
くゝ往生の業にたらんと廻向すべきなり
まる一切の善根こそ極樂に廻向すべしとませい
らて念佛一門に歸して一向に念佛をやうん
人のこゝろに餘の功德をたくまあはめて
廻向せらと申はかゝるぞすべるかた
にこゝろをたたん功德をもこゝろこそのち
なりともをのゝたりにまゝゞひて念佛の

ほうに餘れる善を修する事あんなるもまつ
なり〳〵往生の業に廻向をなすと申事にて侍
るわ。これ心金剛のごとくなりて別解別行の人よ
りやぬ〳〵れざまと申侍ぱ。ぱちきり申ぱる樣なり。
異解の人よりへらまてうれこまよ廻向をなす
事なれと申侍たり。金剛ハ壞ぶれぬれはて
侍るまぱ。たとへよりてこの心乃やぶ〳〵れざん
事を。金剛のごとくなれと申侍。これを廻向發

願心とは申侍れわ。三心あり。ちよ。行ろく
申ひらき侍ぬ。この三心具してうれ願往生
するれ事を。一心もうけぬまん。往生すること叡
えぶと。善導釋しぬ。往生叡祈りん
人。乃これ三心具足をへきなり。乃至こまを叡
安心とはなつなて侍るよ起行とはこれ申
ひ記侍心をへまて。一向よ念佛叡申させ
ますへきに侍。又行まて侍ことを極樂にる

ならひて往生の行をぞ修すべき。
たとへば行ずべきよりて往生なりがたくして極樂に
むまれ往べき行なり。阿彌陀佛の本願なり。釋迦佛
の説教なり。善導の解釋なり。諸師の料簡なり。
念佛をもつて本願とする事にて往生なりがたきほの
行ばかりをすすめ給事往ぜざはの
往べきもいかがきとく聖教をたづねる事にも
なすひあてがひていはせ申にこれをかくるなり。

それなるもちとなるべきいはゆるこの往生よば。
念佛いうまでもなく信じたくはをばしんじ人へ。又
心のひんよりまでもひていづまの行をしてをたと
めんよりまでもひて極樂に迴向せよと申往也 已上
取詮



又ある人往生の用心よりはじめておぼしめす事ども百四十五箇條まで書てたづね給申さるるに上人の御返事あらためおこされをまるる

一心を一ようにて心よくなるべき様にはいかがとも仰事なきなり然らば念佛ばかりにて浄土へまいり侍へきや答心のこゝろぶとはこれ凡夫のならひにてちゝをよぶぬ事にて侍そこで心後

ひらけるようにてよく御念佛せさせ給ふそのつみを滅して往生せしめ給べきなりそれ要念佛をもて罪を念佛だにを志侍へば

一日所作つれづれなるまゝに侍さうず侍こゝろ

きんよ書るゝにてよこと念佛申侍べきや答ずる後

ちぶめの懈怠よりなり侍へば數をしるめ侍ば

よき事にて侍

一ゆゝきぶひる。麝をくゆらして。香うせ侍ぬ。ほたゝ
称よ念佛ハ申侍べきやゝん。答。念佛ハなるゝをさハ
見ぬ事にて侍
一念佛をハ日所作よいそぐりあてゝの申侍
べき。答。念佛のゝずハ。一萬遍をゝゝ。発て。二萬
三萬五萬六萬。乃至十萬まて申侍なり。此中に
ゝゝゝ称よまゝせて。たゞぼゝめ侍ゝん。発を申
ゝゝゝ

一五色ハ糸ハ。佛よはひぐりよ。ゆ。伝侍ぎ。ゆゝ
よいゝ。ゆ。ゝのゝよまゝて。いゝゞひき侍べき。答。
左右ハ手よまゝてひゝゝゝ称べゝ
一齊ゝ侍ハ。功德よまゝて侍やゝん。ゝれら。ゝ。をべき
事にて侍やゝん。答。齊ハ功德をゝる事にて
侍なり。六齊ハ御齊ぞゝゝゝ侍ぬ。ゝゝ。大事
よまゝて。病なゞもたゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝ侍ぬ。
侍ゝゞ。ゝれくゝゝゝ。ゝゝゞ御念佛ゝゝをよく

ゆくそれよりて生死をはなれ浄土に往生
せんずるおもむきんずる事ここれよりべく侍
一ゑんに仏を見たてまつらんに侍らもつ申
さんらん念仏をきてを死侍て。
浄土に往生し侍べきやうん答ゑ侍
いとかしこくこと事侍に仏よむひまいを世
ゑんを念仏をすれば往生し侍なり又
聞ても思侍そをいとかくて信心ふかくて乃

事にて侍
一なんぐ生死をはなれ三界にしまれしと。
なりひ侍よ極楽は衆生られまてをその縁
はきぬまこれ世にむまれと申ことにて
侍。たとひ國王をなり天上にをむまれよ。
ゑく三界をはなれんとれひ侍よいたにあ
をこなひて。帰り侍はるべき答これ侍
くれひ事にて侍。極楽へひとるびむまれ

仏ぬきハ。なにごとも世にうへる事仏ゝ法。これ
ほどらけよたる事にく仏たり。そもゝ人を
こちびうんをもめよ。ゝちゝれようへる事を仏。
さまざまを生死よめくる人よてハ仏ゝ法。三界幾
ちゝ。ゝ。極樂よ往生するよい。念佛よすぐる
事ハ仏ハぬなり。よゝく御念佛仏べきれわ
一歌よむハ罪よく仏ゝ。答。あれゝちに得仏
ゝ。但罪ゝをもれわ。功德ゝをなる

一酒のむハ罪よて仏ゝ。答。よゝくにハのむゝくも
なりまどゝをよれ世乃なゝひ
一錫杖ハかれら法。誦すべきゝ。答。ちれくゝをそ乃
いゝ法よ念佛一遍を申べし。尼法師ゝそあゝく
ゝ。ゝ。虫のゝゝて誦し仏へ
一臨終よ。善知識にあひ仏ゝ法ゝも。比れ念佛よて
往生ハし仏ゝ。答。善知識よあゝ法ゝも。臨終
れゝよやうゝ法ゝを。念佛申ちゝ往生すべし

一心に妄念をいましめ思ふべき事なり

答ぜられ候ふ念仏を申させ給へ

一称てをもはくも口あらばいづれ念仏申べしと

いへども答へ給へ

一六齋日に答へられ候ふべしと

一毎日に所作に六萬十萬の數遍を念珠をもて

申べしと二萬三万を念珠をたりて

申べしと仰せられ候ふ答へ給へ

二萬三萬をあつとをもを如法にはのれひるかへ

ぜ〻數遍のおほうへはすぐ過ぎ候ふ名号を

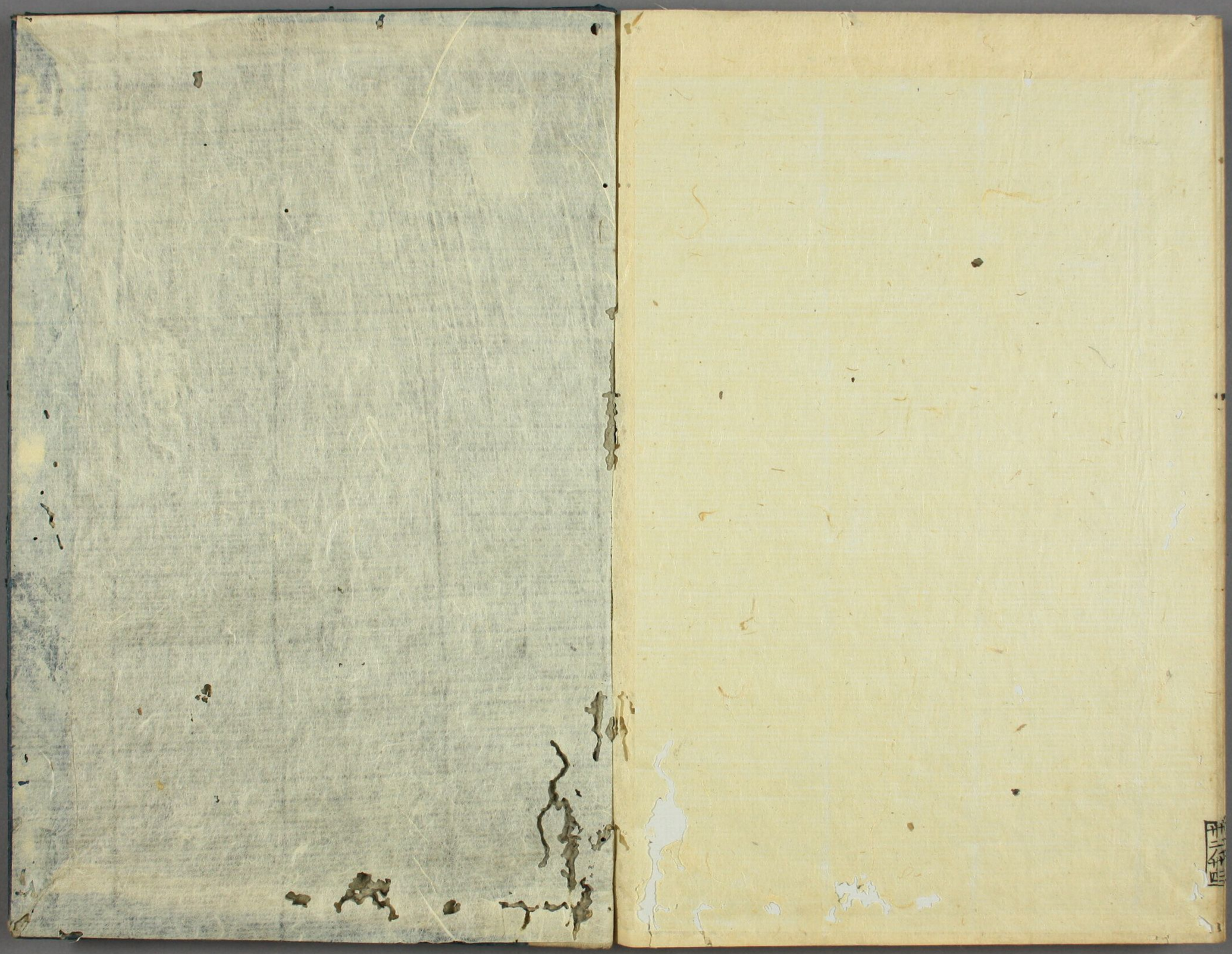
相續せんとあれば力なれば候ふ

とるに人あり候ふ常に念仏せんがため

なれば力なきぬ懈怠の因縁なり

數遍をすむるにて候

一奥島にひて候ふ経ばかりを候べきや答へ

いはせてよむ事なり候ふ功徳を

罪とする法位いうけてをぼ間ぬらうく
よしいうく法
一所作うきうくまいれぼよてうんずる法ぼげ
まい法いうにぼまいうくはまぼうぼよてハ
懈怠なり
一破戒の僧愚癡乃僧供養せんを功徳よて法ぼ
ぼ破戒の僧愚癡の僧をぼ系の世よは仏乃
ごくまうしぼ位ぼよて法なりこれ法位
申法ぬまこうめ法へ
此ハ詞ハ上人のまうしぼ法をなり阿弥陀経の
うにまうまり